州坂本之亂、藏服容色所傳來書載之、此外自古所稱名壺失之者多、右三品者爲重寶、故人能知之、本國呼此器云眞壺、能養茶存香、或容三斤四斤五斤者好尙之、其事世人皆知之、官庫或四方侯家、傳眞壺美稱之者亦多、適於人間稱其名耳、不能盡見、

〔千家茶事不白齋聞書〕壺之事

一眞壺　西湖南京の近所也、西湖は日本ノ湖水如クシテ、ミナ淺き湖水、此所より出る、ルスン丁口物也、丹波燒をも用　橋立の壺名物也、是は外方利休所望致し、其時休の茶道正根と云者を使とシテ取に遣ス歌、正根を請取にこそ參らする渡し給へや橋立の壺、と詠取に遣し候由、樂阿彌之壺名物也、利休所持、少庵宗音ヲ以所望ス、利休遣ス事難成、代口に替可申と云何程ト承候得者、金五枚ノ由、此時少庵金子不調、漸四枚有之、是にて先渡し給へと云、休遣し不申、一兩年過候而金五枚調、利休方少庵江此時休方請取書アリ、樂阿彌壺替として金五枚、慥に請取申候、取次宗音使かつゑきと有り、其時右金子はかつゑき江被遣候由、かつゑきは宗旦の事也、

〔茶道筌蹄三〕眞壺之部

呂宋　むかしは是非眞壺へ茶を貯へしなり、夫ゆへに壺なき者は口切の茶の湯をなさゞりしとなり、尤呂宋を上品とす、豐太閤の時代、眞壺をもてはやしたるゆへ、世間に少く不足なるに依て、左海の納屋助左衞門、太閤の命をうけて呂宋へわたり、壺五十をとり來る、利休是が品を定め、諸侯へわかちしなり、

蓮花王　呂宋の上品、かたに蓮花の上に王の文字あり、

清香　是も呂宋の上品なり、清香の文字あり、

瀨戸　信樂　千家にては、此三品呂宋、瀨戸、信樂、を用ゆ、

〔茶器名物集〕大壺之次第